法政大学比較経済研究所・曽村光利編『新自由主義は文学を変えたか——サッチャー以後のイギリス（比較経済研究所研究シリーズ 23）』（法政大学出版局、2008 年）

中　垣　恒太郎

本書は法政大学比較経済研究所による「研究シリーズ」の 23 巻目にあたる。当研究所は「国際比較の観点を重視しつつ、わが国を中心とする国際経済関係の研究と調査を行うこと」、「特に東・東南アジアとの関係を重視」し、「専門分野をこえた共同研究」を目指して、より広範な現代的テーマの研究を目指して」1984 年に設立されたという。1987 年に刊行されたシリーズ 1 冊目『日本電子産業の海外進出』（佐々木隆雄・絵所秀紀編）以降、『金融のグローバリゼーションⅠ・Ⅱ』（シリーズ 2・3）、『新保守主義の経済政策——レーガン・サッチャー・中曽根三政権の比較研究』（シリーズ 5）、『中国経済の新局面——改革の軌跡と展望』（シリーズ 6）、『韓国の経済開発と労使関係——計画と政策』（シリーズ 7）、『アメリカ経済の再工業化——生産システムの転換と情報革命』（シリーズ 13）、『東南アジアの環境変化』（シリーズ 17）など、足かけ 20 年にわたり、コンスタントに研究所の成果を刊行してきている。『レジャーと現代社会——意識・行動・産業』（シリーズ 14）、『市場とジェンダー』（シリーズ 20）などの学際的研究もあわせて、「比較経済」研究所ならではの、バラエティに富んだ地域比較・テーマ別探求に特色があり、今日のグローバル経済の状況、多彩な研究動向を的確に反映している。この 20 年の間の経済研究のトレンドを窺い知るための格好の素材ともなるであろう。その中で、本書評にて取り上げるのは、2008 年 3 月に刊行された『新自由主義は文学を変えたか——サッチャー以後のイギリス』と題された、学際研究の成果である。

些か穿った見方になるかもしれないが、当研究所の多くの研究員が主たる所属先としているであろう同大学経済学部の人員構成が可能にした学際研究といえるのではないか。1991 年のいわゆる「大学設置基準大綱化」以後、多くの大学で教養部「解体」により、語学担当教員を含む旧・教養担当教員が学部に「分属」することを選択した。同時に、「大綱化」以前からも学部に分属する形で教養担当教員を配置していた大学も少なくはなかった。いずれにしても、専門課程の学部に特化した形で教養担当教員を配置する形態は日本の大学制度においては比較的よく目にすることができるものである。「教育」に関するかぎり、所属先の学生の需要を意識した授業運営は珍しいものではなく、むしろ当然のことと言えるが、「専門分野を超えた共同研究」の実践は今日においても決して多く見られるものではないのが現状である。地域研究の枠組であるならば、経済、文学、政治、あるいは歴史などの幅広い専門分野からなる共同研究の先行例を挙げることは難しくないであろう。また、文化研究・カルチュラル・スタディーズにおける学際的研究の領域において経済、文学、政治などの研究成果が交差する取り組みもすでに一定の成果が示されて久しい。しかしながら、経済学の分野に根ざした枠組の中で、社会・文化・政治・思想との関わりについて、文学研究を土台に展開する本書の試みは、（もちろん中央大学経済研究所研究叢書『歴史における文化と社会』〔1987〕など同様の事例は散見されるものの）、これまでありそうで

実は実現が稀であった、独創的な共同研究の成果たりえている。

とりわけ今日の文学・文化研究はその対象となる時代の政治・経済・社会状況を把握することなしに研究の遂行は困難なものになりつつある。文学研究において一大潮流たりえてきた「新批評」（ニュー・クリティシズム）による、対象となるテクスト以外の要素を排する方法論は、「テクストを精密に読む」（クロース・リーディング）という意味において今なお有効さを保ち続けているが、あらゆる文学・文化作品は、意識的にせよ、無意識的にせよその時代思潮の影響から無縁ではいられないものである。であればこそ、テクスト以外の要因を「意図的に」排し、「純粋に」文学性を追求する営みが新しい文学研究の方法論として、人文科学研究の可能性を推進してきたわけである。

近年、政治・経済・社会を含む文化研究の方法論に基づく文学研究の成果は多く示されており、その中で経済的な側面によるアプローチの例としては、文学作品そのものが商品としていかに流通していたのか、を探る試みを挙げることができる。文学研究者、マイケル・T・ギルモア（Michael T. Gilmore）による *American Romanticism and the Marketplace* (University of Chicago Press, 1985、『アメリカのロマン派文学と市場社会』片山厚・宮下雅年訳、松柏社、1995年）は、超絶的なアメリカ・ロマン主義作家たちまでもが新興の市場主義経済と無縁な存在ではなかったことを解き明かす試みであり、この領域の先駆的研究に位置づけられる。古典文学作品を政治・経済的観点をも含む歴史的水脈において捉えなおす研究はすでに一定の成果がもたらされてきたと言えるが、本書の射程は「サッチャー以後」、すなわち、サッチャー政権誕生の1979年以後（1990年まで首相）、ジョン・メージャー（1990-97首相在任）を挿み、本書が刊行される直前まで首相をつとめていたトニー・ブレア（1997-2007首相在任）が、第74代英国首相ゴードン・ブラウンに政権を託すに至るまでを時代の一区切りとして捉え、この間に起こった経済政策・傾向の最大の特徴となる、いわゆる「新自由主義（ネオリベラリズム）」から「グローバル資本主義」への動きが、はたしてイギリス文学の潮流に影響を及ぼしたのか否か、を問いかける壮大な構想に基づいている。

本書は3部構成になっており、編者をつとめるイギリス文学者、曽村光利氏による序章「1979年以降のイギリス社会と文化」において、「新自由主義（新右派）」と称されるサッチャリズムの特徴が、「古典的社会民主主義（旧左派）」との対比によって明確に定義され、「ニュー・レイバー」を唱えたブレア政権に至るまでのイギリスにおける政治・経済・社会状況までが概観される。文学・文化の側面においても、イギリス連邦およびアイルランド国籍を持つ作家によって英語で書かれた長編小説の中で、もっともすぐれた作品に与えられる「ブッカー賞」は1968年の創設以来、世界的水準においてももっとも権威ある文学賞として位置づけられているものであるが、近年の受賞者の特徴として、2008年度受賞者であるインド出身のアラビンド・アディガ（Aravind Adiga, 1974- ）に代表されるように、旧英国植民地領出身作家の躍進が顕著に目立ち、「英国文学」の伝統を大きく変容しつつあることがわかる。本書の第1部では、「サッチャーの研究」と題し、理論経済学者・奥山利幸氏による論考「サッチャリズム——経済的自由の回復」が続き、サッチャー政策の意義について「序章」を理論的に補足する。比較経済研究所ならではの、文学

／経済研究の交差・融合がここでは見事に果たされている。さらにおもしろい仕掛けとしては、同第一部において、文化研究・カルチュラル・スタディーズの観点から、滝沢玄氏による第２章「ニュー・レフト・アローン――スチュアート・ホールとサッチャリズム」、また、コーパス言語学の観点から、小林雄一郎氏による第３章「サッチャーのレトリックを計る――コーパスに基づく通時的分析」が続く。2008 年度の最大の出来事の一つであるアメリカ合衆国大統領選挙においても見出せるように、政治家としての力量を分ける要素の一つに演説や声明における「レトリック」の効果は見過ごせないものである。人文・社会研究を横断する形で、「サッチャリズム」とは何であったのかを多角的に捉えようとする視座が十二分に示されている。

第Ⅱ・Ⅲ部は文学研究の成果であり、「小説・散文」と「詩」に二分され、第Ⅱ部「自由な社会と小説」、第Ⅲ部「政治と詩人たち」という構成になっている。第Ⅲ部は、その起源を、17 世紀あるいは実質、中世に遡るともされる「桂冠詩人」の伝統を有する「英国文学」ならではのものと規定し、第９章「あるエデン幻想の消滅――桂冠詩人が見たサッチャー時代」（加藤英治氏）、第 10 章「炭鉱の消えた丘――グレート・ストライキおよび以後のウェールズの詩／詞」（永田喜文氏）、第 11 章「サッチャリズムと北アイルランド詩」（佐藤泰人氏）の論考により構成されている。「桂冠詩人」という「英国文学」独自の伝統文化がサッチャー政権においてどのように機能していたのか、また、いわゆる「イギリス」がイングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズから成り立つ「英連邦王国」としての地域による多様性を改めて実感させてくれる効果を発揮している。

このような構成であればこそ、第Ⅱ部におけるそれぞれのイギリス小説作品論もまた、より一層照り映えるものになっている。第４章「1980 年代精神の虚像――マーティン・エイミス『マネー』」（保坂昌光氏）、第５章「愛こそはすべて――厄介な道徳家、イアン・マキューアン」（木村正則氏）は共に現代イギリス文学においてもっとも鋭敏かつ活発に活動を展開中の二作家、エイミス（Martin Amis, 1949- ）、マキューアン（Ian McEwan, 1948- ）をそれぞれ論じたものであり、第６章ではその二作家に先行する世代の作家兼大学教授、デイヴィッド・ロッジ（David Lodge, 1935- ）を素材に、「サッチャー時代のキャンパス・ノベル――デイヴィッド・ロッジとマルコム・ブラッドベリ」（大平章氏）を配置することにより、作家・作品の世代間比較に加えて、大学（知の現場）を取り巻く状況の変化にも目が向けられている。加えて、今日の「英国文学」に「多様性」の彩りを添える存在として、パキスタン系移民の父を持つハニフ・クレイシ（Hanif Kreishi, 1954- ）、長崎生まれの日系イギリス人作家でブッカー賞受賞歴も持つカズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro, 1954- ）論が続く（第７章「ポストコロニアル・ビリデゥングスロマン――ハニフ・クレイシ『郊外のブッダ』」[木村正則氏]、第８章「愚かさの自覚と自由な生――カズオ・イシグロ『日の名残り』」[曽村光利氏]）。サッチャリズム以後の時代思潮がいかに小説作品の中に反映されているのかを探究した各論はそれぞれ独立しても充分に読み応えのある論考であるのだが、３部構成による多角的視座による相乗効果ゆえに、より一層の効力を示している。巻末の「関連年表、1979-2007 年」も、意外に手薄であることが多い各国別現代史にとって貴重な資料性を有している。これだけ重層的な研究成果であるのだから、願わくば、政治や歴

史の側面から「サッチャリズムおよび以後の時代」を捉える論考があればという思いすら抱かせるが、本書が「比較経済研究所」による叢書であることからも、無いものねだりにすぎるであろう。

書評子の専門領域がアメリカ文学であることもあり、未知であった情報や視点を大いに楽しむことができた一冊であり、アメリカナイゼーション／グローバライゼーションの動向を相対化しうる位置にあるイギリス文化の特異性を改めて再認識させられた。中でももっとも啓発させられたのが、「自由主義経済・社会体制下の文学」と題した研究プロジェクトとして2004年に発足したという、本書の基盤を成した共同研究の在り方である。かねてから私の専門領域である現代アメリカ文学・文化を、政治・経済・社会の側面から展望することはできないか、と構想していたのだが、本書の試みは道標を照らしてくれると同時に、「専門分野を超えた共同研究」の醍醐味を提起してくれるものでもあった。